

こどもの意味

東京女子高等師範學校教授 石川

謙

一

幼児期をやゝやう巢立たせて、この頃やつゝ兒童期に送り込むこゝの出來た子供を三人まで持つ私ではあるが、それでるて、語るに足るやうな體驗をついぞ擱み得なかつた怠惰な私でもある。子供の二人までが、幼児期に於いて、可なりに長く可なりに重い病氣にかゝつて、醫者に縋りもし神に祈りもして、あはてふためいた見苦しい生活を生活したこゝもありませんながら、自分達の養育振りに反省のメスを加へようこもせず、「試練」だの、「與へられた運命だの」こあつさり片付けて來た愚かしい私である。今にして「幼児の教育」を語る資格がないし、また其の圖々しさもない。

今から考へて見るに、子供さいふ存在に對する私の考へに物足らぬこゝがあつた。さ言ふよりも、寧ろ或る意味ではまるつきり誤つてゐた。心理學的な醫學的な存在さしての子供——大人ではない所の子供さいふ程の意味での子供さいふ觀念は、それは或は心得てゐたつもりである。無論、教育學の書物さか教育史上の大思想家の意見さから仕入れた極めて觀念論的な、理屈ばつた觀念には相違なかつたが……。かうした意味での子供、換言するに子供の心理學的・醫學的な條件を眼中に置いた取扱ひ（養育法）は、それ自身正しいものであり、當にさうあらねばならぬものではあるが、それだけこゝに心を奪はれてゐる養育は、實は大きな「物足りなさ」を胎藏してゐるやうに思はれる。一體、醫學的・心理學的條件を理解し會得して、これに適合するやうに親たる我れ等を働かせずには措かぬ力は、抑々何であるであらうか。言ふまでも

なく母性愛であり親の慈悲心であること、苦もなく答へるやうに我れ等は考へ慣らされてゐる。この場合、母性愛こそは凡ゆるものに先行し、あらゆる知性に指令を與へる最後の權威者になつてゐる。合理性に對する非合理性の優越が前提になつてゐる。然し、母性愛のみで、果して合理性の正しき發動をいつも保障することが出来るであらうか。我れ等が「物足りなさ」を感じるこいつたのは、實にこの點である。「子供」をいつでも「我が子」にして獨占的に感じてゐなければ淋しさに堪えぬ「母性愛的なもの」以上に出て、子供そのものに内在する光輝を、脆まついて母さへも父さへもが仰ぎ見る峻嚴な、神聖なものを認めなくてよいであらうか。

二

かう言つて來ること、人は直ちに西洋教育の思想に做つて、子供そのものゝ中に於ける神的なものを想記するであらう。然しそれは、超人間的な唯一の神と、一切が平等な無数の人間とから、この世界が出来てゐること考へる西洋的信仰に於いてこそ成立する信念である。家族制度の上に立ち祖先崇敬の信念に生きる我が國現實の社會に、びつたり、當嵌まる信念ではない。この點について我れ等は、より現實的な、より日本的な、子供教育に對する原動力觀念を、我れ等の先覺者の中に見出すことが出来る。そしてそれに二つの類型があつて、中江藤樹と貝原益軒とによつて夫れ夫れ代表せられる。藤樹によること、我が身は父母の分身であり、子供は我れの分身であるから、子供に於いて我れ等は、我れ等の父母、祖父母、曾祖父母を見出すことが出来る。子供はそれ故に子供ながらに先祖である。遠い過去から受け繼いだ生命の一齣であること共に、永遠の將來に向つて求むべき理想の、今のこの我れよりも一步前進した（理想に近付ついた）状態に置かれなければならぬ筈の存在である。我が子ながらにして我が子でない。我れと共に、我れより進んで（先祖の理想としたものに近づくなること論理的な意味で）、一層「先祖的なもの」を考へることが出来る。それ故に、子供を愛し子供を導く心は、先

祖に事へ先祖に奉ずる程の意を籠めた真劍味、莊嚴味がなければならぬ。かくてこそ、子供の教育は人間第一の課題であり任務であつて、醫學でも心理學でも、あらゆる科學や技術に援兵を求める謙虛な氣持が生れ出づるのである。こいふのが『翁問答』の中で藤樹が説いた主張を、現今の我々の言葉で敷衍したものである。貝原益軒は、子供の體ミ子供の心ミは、その構へも働きも大人のものと同じでない特異のものがあることを發見し、詳細に組織的に研究した我が國最初の學者である。ルソーが西洋に於ける「兒童の發見者」であると言はれる意味に於いて、益軒は我が國に於ける「兒童の發見者」である。彼れによるこ子供の「子供のなもの」の奥に、やがて綻びて花ミ咲くべき「大人のなもの」が疊み込まれてゐる。その「大人のなもの」ミ言ふのは、眞の意味に於ける人間的なものゝここで、父母も持ち先祖も持ち、天地も持つこころのものである。歴史的に漸次に發展して來てゐる普遍者、一般者のここである。子供に内在するこの歴史的な一般者を見出し、引出す仕事は教育であるが、教育はそれ故に、敬虔な念から出發さるべき事天の業なのである。かう眺めて來るこ、藤樹にも益軒にも、子供に於ける醫學的・心理學的な法則を、兒童生活の實際にまで引出して來て實生活化させる指令の發動者を、唯單なる母性愛のみに求めなかつたここが判る。彼れ等は、母を越え子をも越えて、共に振ひ立たせる指令者を、母ミ子ミの兩者に胎藏する一層莊嚴な合理的な權威に求めたのであつた。極めて日本的な魂ミ姿ミに於いて……。

（昭和十三年六月一日稿）